

『梶大国際コミュニケーション学部研究論集―言語と表現―』 第二号刊行に寄せて

『梶大国際コミュニケーション学部研究論集―言語と表現―』第二号が刊行されることとなった。この『研究論集』第二号には試論^{エッセイ}と翻訳を、それぞれ二編、掲載することができた。今年度はシンポジウムの開催を見合わせたためか、論集への投稿は四編と、少数にとどまった。しかしそれぞれの投稿原稿は、その内容に即して言うなら、国際コミュニケーション学部の論集にまことにふさわしいものであったと言える。日本文化、アメリカ文学、フランス思想、ドイツ哲学、中国文化、等々、……文化、文学、思想などの語の前に名が付き熟語化した複合名詞は数多くあるが、生身の身体をもって現代を生きるわれわれ一人一人が自ら呼吸する文化の総体を、それら数多くの複合名詞のいずれか一つをもつて指し示そうとしてもそれは不可能である。現代を生きる者はその生活空間が何処であれ用いる言語が何であれ、単一の文化の中にはなく、さまざまな文化が交錯するそれら諸文化の結末点に身を置いているからである。現代とはそのような時代なのである。例えば、自分自身の生活の拠点を現代日本に置き、日本語で考え、日本語で感じ、日本文化の真っ只中に位置する人々もいやおうなくアメリカ文化やフランス思想や、言うまでもなく古典的な日本文化や中国文化を、すでに呼吸してしまっているのが現代という時代である。それゆえ、われわれ現代を生きる者は、自己表現を試み、その自己表現を通して自己自身を他者へとコミュニケーションし、こうして自己自身と他者が共存できる場所を誠実に切り拓いてゆこうとするなら、まず第一に表現されるべき自己自身を適確に掴み取るためにも、さらにまた第二に自己自身をコミュニケーションしたいと願う他者をその他者に固有のさまざまな文化的背景のもとに理解するためにも、さまざまな文化が交錯する（今とここ）に自覚的に関わることを不可避の課題として引き受けることになる。おそらく、この課題を引き受けこの課題に十分に応えようとする者だけが、さまざまな文化の結末点に他ならない自己自身という場所を、それら諸文化を溶け合

せる現場へと変容し、新しい文化を創造し発信する原点へと変えてゆくことができる。また、こうした変化、変容によってのみ、自己と他者が共存する場所が拓かれてゆくのである。今回の論集に掲載することができた四編の原稿はいずれも、文化発信と文化創造の能力ならびにコミュニケーション能力の育成を教育理念とする国際コミュニケーション学部の論集にふさわしいものであった。

二〇〇五年三月三十一日

国際コミュニケーション学部 学部長 北岡 崇